

## 「スポーツボランティア」概念の周辺

武隈 晃 \*

(1996年10月15日 受理)

An Overview on the Conception of "Sports Volunteer"

Akira TAKEKUMA

### 1. スポーツボランティア概念の提起

「ボランティア」なる名辞がブーム (boom) やファッド (fad)<sup>注1)</sup> と呼ばれる様相を呈しわが国を席捲しつつある。もともと "volunteer" はブームやファッドとは最も縁遠いはずの存在であるが、俗に「熱しやすく覚めやすい」といわれる日本人気質においては、これもブームに終わる恐れは大いにある。

ボランティアが脚光を浴びた背景には1995年1月の阪神淡路大震災があった。被災者に対するボランティア活動は、日本においてそれまでどちらかといえばマージナルな領域にあったボランティアを一気に国民的関心事に引き上げた。

われわれはこうした現象をブームに終わらせず、市民生活の中にしっかりと根ざした「日常的行為」としてそれが広く認識されていくために必要な諸条件について検討を重ねていかなければならない。研究的な立場からは、ボランティアが多くの研究領域にわたる経験対象であるがゆえに複合領域的・学際的アプローチが求められるのは当然である。特に、ボランティアが社会的文脈において成立する「社会的存在ないし行為」であることに注目すれば、日本におけるボランティア従事者の心理社会的特性の解明が社会学や社会心理学領域を中心として早急に成される必要がある。その際、緊要の課題の一つとして、日本的ボランティアの行動原理を解明することがあげられる。その理由は次に述べるようなボランティアの起源を溯ることによって理解される。

ボランティアは元来キリスト教の教義に基づいた勝れて宗教的な行為であり、キリスト教徒によるボランティア活動の源泉をそこに見いだすことができる。キリスト教的行為が、ごく自然に「天国の入場券 (杉野, 1995, p. 71)」を手に入れるためのボランティアを生むのに対して、非宗教的活動としてのボランティアの行動原理を自明視することは適当ではない<sup>注2)</sup>。「なぜボランティア主体になるのか」、「なぜ、何を求めてボランティア活動を行うのか」という問いに学術的に答える解を探求しなければならない。

\*鹿兒島大学教育学部 (体育経営学)

さて、スポーツに関わるボランティア活動についてはどうか。後で示すような範囲でスポーツボランティア概念の示す外延を措定すれば、日本においてスポーツボランティアに関わる人々の数は決して少数ではない。しかし、一般に「スポーツボランティアをしていますか」と問われてyesと回答する人はそれほど多くはない<sup>注3)</sup>。その理由の一つはボランティアを社会福祉領域、チャリティ、環境保護などと結びつけて理解する傾向が強いこと、したがってスポーツのようにそれらと一定の距離を置く活動と広く認識されている領域において、ボランティアという言葉自体がスムーズに取り入れられにくいことがあげられる。スポーツ概念とボランティア概念は人々の意識の上では結び付きにくいのである。また、スポーツ指導の領域において特異な問題もある。他の文化活動と異なり、スポーツのピークパフォーマンスを示す時期がかなり若年齢期にあることもスポーツ指導がボランティアとは認識されにくいことの遠因となっている。自らの体力的限界を昇華させる手段として他者(大多数は自分よりかなり若年者)の身体を借りたスポーツ行為(成立のための指導)に没頭することを本音のところで理解することはそれほど難しいことではない。いわば、自己実現のための具体的な行為がスポーツ指導であり、この場合ボランティアであるという意識は稀薄である。

しかし、スポーツボランティアが全く意識されてこなかったわけではない。このことについてはスポーツイベントの領域に言及しなければならない。特に1980年代以降の市民マラソンに代表される「参加型スポーツイベント<sup>注4)</sup>」、このところ全国各地で目白押しの「観戦型スポーツイベント<sup>注5)</sup>」の普及(数的拡大と社会的認知の高まり)はスポーツのイベントとボランティア概念が明確に結びついた形で社会に知られている。

政府や行政主導のオリンピック大会や国民体育大会などのイベント<sup>注6)</sup>に対して、上にあげたものは、基本的には「民間」ないし「(市町村レベルの)自治体」主導のイベントであるがゆえに、その成立に一般市民のボランティアが不可欠であることはいうまでもない。

ただしこの場合のボランティアは「スポーツ」に強く結びつくものであるのか、あるいは「イベント」により結びついたものであるのかは不明である。すなわち「スポーツボランティア」と「イベントボランティア」のどちらか、あるいは「スポーツイベントボランティア」のいずれの位置づけでそれを捉えることができるのか、あるいは捉えるべきなのか、それによってボランティアとしての理解のしかたは異なる。

また、福祉領域においても「スポーツ」が市民権を得るにつれて、たとえば障害者のスポーツを成立させるための要件としてボランティアがようやく注目され始めている。この場合も社会福祉に関わるボランティアの対象がたまたまスポーツであるという理解の仕方をするのか、「障害者スポーツのボランティア」として理解するのかによって議論の展開は異なる。

以上のように、ここ数年日本においても「スポーツ(の世界)」と「ボランティア(の世界)」が理念上も実践上も結びつきを強めつつあるといえよう。しかしながら敢えて「スポーツボランティア」概念を提起し、そのことの有効性を問うためにはもう少し踏み込んだ議論が必要である。

本稿ではこれまでのボランティアの概念規定に学びつつ、スポーツボランティアをひとまず「個人の自律的な決定と選択に基づく、公益性、非営利性を前提としたスポーツに関わる社会的活動、およびその行為主体」と規定し、検討を進める。これまでの一般的な規定と異なる点は二つである。第一点は、「無償性」という表現を意図的に外した。それは「無償」の理解が人によって異なること（たとえば弁当や交通費程度の支給を無償とするのか有償とするのか判断は分かれている）、ボランティアの領域によって違いがあるが、実費程度の支給でもボランティア精神に抵触するという立場とそのようには考えないという立場が混在していることによる。本稿ではボランティアが日常的行為として根づいていくためには厳密な意味での無償性からひとまず離れる必要があると判断した。ただしこのことは純粋な「無償」行為を否定するものでも前近代的として位置づけようとするものでもない。実費程度の支給をよしとするか否かは、ボランティア主体を中心としたボランティアに関わる人々の間で、自らの判断によって決められるべきものであろう。

第二点は、「社会的活動」とその「行為主体」を包摂する概念としたことである。これはボランティア概念の通常的な使われ方を勘案したものである。「ボランティアに行く」は前者の、「ボランティアを募集する」は後者の意味での使用例である。本稿で両者を明確に区別して用いる場合は前者を「ボランティア活動」、後者を「ボランティア主体」と記述する。

スポーツボランティアの範囲は後に詳述されるが、本稿では次の範囲内で検討を進める。すなわちスポーツボランティアにはスポーツイベント、スポーツ指導、障害者や高齢者スポーツなど広範に渡る領域が考えられるが、ボランティア主体の属性にかかわらず、これらの活動に従事する人々及びその活動は「スポーツへのボランティア」として理解することができる。一方、プロスポーツ選手やそれに準ずる高い競技力をもつ（著名な）競技者のボランティア活動、あるいは学校運動部を含めたスポーツ集団に所属する競技者やスポーツ愛好家が組織・集団単位でさまざまなボランティア活動を行うことがある。活動の対象がスポーツに関わるものであれば、「スポーツへのボランティア」の範疇で理解すれば何の問題もない。しかし活動の対象がスポーツと関わりのない場合、たとえば福祉領域や生活領域全般に関わるものである場合は、これを同列に扱うことができない。プロスポーツ選手が被災地で炊き出しのボランティア活動を行ったり、有名スポーツ選手が（スポーツに関係のない）チャリティを行ったりすることなどの例である。これらは「スポーツ（の世界）からの（スポーツ以外の領域に対する）ボランティア」とすることができる。

先の概念規定からは「スポーツへのボランティア」だけをスポーツボランティアと理解するのが自然であるが、最広義に解釈すれば後者（スポーツからのボランティア）をスポーツボランティアの概念に包括することも可能である。本稿では前者を論じ、後者については今後の課題としたい。もちろんそのことは後者の研究対象としての価値が低いことを意味するのではない。スポーツの世界から個人・集団・組織がスポーツ以外の世界にどのような機序でアイデンティティを保持させながら関わっていくのか、スポーツ選手とそれ以外ではボランティアの行動原理が異なるのか等々、興味深い課題は多い。

## Ⅱ. スポーツボランティアについての実証研究の必要性

先にも指摘した通り、スポーツボランティアに関する実践科学的領域の課題の一つは、その行動原理の解明にある。それについての研究動向について若干触れておこう。

日本の場合はすでに触れたようにスポーツボランティアの歴史自体が浅く、未だその導入期にあると判断せざるを得ない。したがって当然のことながら研究上の蓄積は脆弱であり、スポーツイベントボランティアや障害児キャンプにおけるボランティア活動の継続意欲や継続性を検討した、長ヶ原・山口(1991)、綿(1992)、佐藤他(1996)、新出他(1996)やボランティアスポーツ指導者のドロップアウトについて検討した松尾他(1994)の研究が目につく程度である。これらの研究はいずれも、なぜボランティア主体になったのか、なぜ何を求めてボランティア活動を始めそれを続けているのか(あるいは辞めたのか)といった、本稿でいうボランティアの行動原理(具体的には後で触れられるように行為の「契機」と「非物質的報酬」の有りよう)に直接・間接論及しているという点において共通している。萌芽期にあるスポーツボランティアの特性、日本における階層性の強い組織や集団の特殊性、一部で指摘される動員型の参与等々、日本のスポーツボランティアそれ自体の特性に関する解明が必要であり、それゆえになぜ行うのかという問題設定は本稿と共通している。

日本の斯分野の研究が立ち遅れている理由についてももう少し検討してみたい。先にも指摘した通り、日本においては「ボランティア」を福祉や生活の保障という側面から捉えることが多く、いわば「生活のためのボランティア」として認知されてきた。もちろんかかる領域におけるボランティアの重要性が今後も揺るぐことは有り得ないが、それを含めさらに発展させる形で「生活文化(これには文字通り生活に関わる文化という意味と生活と文化活動という二重の意味を持たせている)」の支援者としてボランティアを捉えていくことが求められていると考えられる。とするならばスポーツボランティアが概念的にも一般の認識の上でも承認されていくためには、スポーツおよびスポーツ活動が文化(生活文化)として広く認識されることが必要条件である。言い換えればスポーツとボランティアが結びつきにくかったのは、スポーツの文化としての社会的認識が日本においてはスポーツ先進国に比べてかなり弱かったことの証左ともなる。

文化としてスポーツが存在し発展するためには単にそれを「行う人や組織」だけではなく、「見(観)やり聴(聞)いたりする人や組織」、スポーツ現象が成立する(しやすくする)ためにそれを「支える人や組織」が必要である。このことは芸術や文学などの先進的文化をみれば明らかである。「行う・みる・支える」が時に相互の位相を変えながら<sup>注7)</sup>、三位一体となってスポーツ文化を構成するものと考えられる。

要するにスポーツボランティアの認識とそれに呼応した学術研究の発展は生活文化としてのスポーツ認識に一定程度依存しており、その停滞が日本における研究の立ち遅れをもたらしたこと、したがって現在におけるかかる認識の高まりは研究活動の促進をもたらすであろうことが指摘できる。もう一つの促進要因は高齢者や障害者のようにこれまでスポーツとは縁遠かった人々の間にス

スポーツの萌芽（高齢者スポーツの代表格としてのウォーキング、体操、ゲートボールなどはすでに発展期ないし成熟期に入っているとみることでもできる）が確認できることである。高齢者や障害者のスポーツ（本稿では以下「福祉スポーツ」と呼ぶ）とボランティアは比較的近接性が高いことから、福祉スポーツの台頭はかかる領域におけるボランティア活動の成立をもたらすことになる。以上のように日本におけるスポーツボランティアの研究条件は好転しているとみることが可能であり、今後精力的な研究活動が期待できるであろう。

ただ、先にあげた国内の先行研究は、スポーツボランティアといっても、スポーツイベントのボランティアに対象は概ね絞られており、他のスポーツボランティアについての実証研究はほぼ手つかずの状態であること、本稿でいう行動原理の解明といっても、ボランティアの参加動機や継続意欲が発見的に明らかにされるに止まっている点に問題は残されている。スポーツボランティアの行動原理を仮説検証的に実証していくためにはスポーツボランティアの概念的な枠組みの整理がまず必要である。

一方、国外に転じては、スポーツボランティアの理論研究、実証研究はかなり充実しており、行動原理の解明に関する基礎的研究も多い。いくつか例を示しておこう。Gould and Martens (1979) はボランティアコーチのスポーツに対する態度の一般的特性を明らかにした。Bannon (1985) は「みんなのスポーツ」実現のためのボランティア組織およびボランティアの役割について報告している。Slack (1981) はカナダアマチュア組織に所属し、スポーツ管理者としてボランティア活動を行う人々の属性や人口統計的特性、参与の仕方や興味について詳細に報告している。Andrew (1996) の研究は大規模スポーツイベントに参加するボランティアの動機づけや期待について検討したものである。

しかし、ボランティアがその社会に固有の産物であることをみれば、研究方法についてはともかく、研究成果として得られた知見を歴史的、文化的、社会的文脈の異なる日本のスポーツボランティアにそのまま置き換えることは難しい。日本における実証研究は正にこれからである。

### Ⅲ. スポーツボランティアのカテゴリーと行動原理

表はスポーツボランティアの行動原理を説明するために仮説的に設定された「主体のカテゴリー」、「活動の契機（典型的なタイプに類型化された活動を開始する契機）」、「活動の過程および結果に対してもたらされる非物質的報酬」について、相互の関連性や独立性を主要な観点として提示したものである。

かかる仮説的枠組みの主な特徴は次の二点である。第一点の一つのボランティア主体のカテゴリーでも活動の契機は必ずしも単一ではないとしたことである。ただしいくつかの典型的パターン（本稿では「～型」とした）は確認され、多くの場合それぞれには他者や組織とのつながりがもたらす意識的・無意識的な心理的「しがらみ」も存在することを仮定した。それぞれのカテゴリーにはいくつかの契機をもつボランティア主体が混在しているのが実情である。第二点はボランティア活動

の創始に関わる「契機」と、活動の継続に関わる「報酬<sup>注8)</sup>」を明確に区別して捉えようとしたことである。これに似た立場は北米での研究でも散見され、たとえばMcClam (1985) は、利他主義や自己実現を含む「動機づけ」と社会的相互作用や社会的承認を含む「報酬」の間に関連性はほとんど認められないことを実証的に明らかにしている。契機と報酬それぞれの解明と両者の関連性に関わる分析こそが日本におけるスポーツボランティア研究の根本的課題の一つとすることができよう。

#### スポーツボランティアの категорияとその行動原理 (仮説)

ボランティア主体の категория	ボランティア活動の契機	(非物質的) 報酬
1. スポーツイベントのボランティア 例) 観戦型スポーツイベント 参加型スポーツイベント	農村 (地縁) 型 . . . . . 互酬性 (緩やかな交換関係) スポーツ組織型 . . . . . スポーツ組織へのロイヤルティ 都市型 . . . . . 個人的契約	名誉, 選手や参加者との交流 等々
2. 福祉スポーツ (レク) のボランティア 例) 障害者スポーツ 高齢者スポーツ	血縁型 . . . . . 家族愛・博愛 ボランティアリズム型 . . . . . 博愛・友情 組織型 (福祉施設を含む) . . . . . 組織へのロイヤルティ	交流, 福祉活動への参画意識 等々
3. チーム (クラブ) 指導のボランティア 例) 少年チーム 婦人サークル	スポーツ組織型 . . . . . スポーツ組織へのロイヤルティ 学校組織型 . . . . . 学校組織へのロイヤルティ 非組織型 . . . . . 個人的契約	交流, 名声 (社会的評価) 等々
4. 学習プログラム支援のボランティア 例) スポーツ教室	スポーツ組織型 . . . . . スポーツ組織へのロイヤルティ スポーツ施設型 . . . . . スポーツ施設へのロイヤルティ 非組織型 . . . . . 個人的契約	被指導者との交流, 自尊欲求の充足 等々
5. その他のスポーツボランティア		
スポーツボランティアに共通	社会的貢献 (自分の時間を社会に提供) 社会的連関 (疎外感や他律性からの脱却) 専門的能力の開示	自己実現, 関係欲求の充足, 感謝の念 等々

ボランティア主体については、まず五つのカテゴリーを設定した。これらのカテゴリーは厳密に言えば一部で重複する部分がある。それは福祉スポーツ領域のイベントに関わるボランティアを「スポーツイベントのボランティア」として扱うのか、「福祉スポーツのボランティア」として扱うのかという点である。また、たとえば障害者スポーツの競技力やチームとしての集団性が高まった場合、「障害者スポーツのボランティア」とするのか、「チーム（クラブ）指導のボランティア」とするのかという問題もある。しかしながら、表に示した四つ（その他を加えると五つ）のカテゴリーは、日本におけるスポーツボランティアの現状と近い将来を洞察すれば不可欠のものとして定立することができる。四つのカテゴリーはスポーツボランティアとして解明しなければならない課題の束をその内部に有している。

「1. スポーツイベントのボランティア」は観戦型スポーツイベントと参加型スポーツイベントの主に運営・管理に関わるボランティアである。

観戦型スポーツイベントは一流競技者による競技を競技場で直接に、マスコミ等を通して間接に、「みせる」ことを中心的な目的としたスポーツイベントである。みせることに向けてイベントの管理・運営は成されること、一般に集客力のある都市部でこれが行われること、当然のことながら一流競技者が集まること、などに伴ってボランティアにも特徴が生まれる。「活動の契機」は文字通りボランティア活動を始めた「きっかけ」や本質的要素となる諸要因であるが、観戦型スポーツイベントのボランティアのうち一定程度が典型的な「都市型」のボランティアと理解することができる。このタイプは、何らかの「しがらみ」によって活動を始めるのではなく、文字通りイベント主催者（運営者）と主体個人の「個人的な契約」によって行為が成立すると考えられるものである。イベント主催者（プロデューサー）がマスコミを含めて広くボランティア参加者を募り、それに応じた個人が自発的にイベントボランティアとしてそれに加わる。また、主催者側には多くの場合、競技団体などのスポーツ組織が強く関与している。したがって、スポーツ組織の構成メンバーである場合やその傘下の団体・集団に所属している場合には、組織からの要請に基いてボランティアに関わることも多い。単一種目のイベントの場合は種目別競技団体に対するロイヤルティ（忠誠心）が、多くのスポーツ種目を含む総合的なイベントの場合はそれに加えて体育協会、企業組織、行政組織、教育組織などの諸組織に対するロイヤルティが活動の契機となる場合が増えるものと考えられる。

参加型スポーツイベントは、多くの市民スポーツ実践者が参加して楽しんだり、日頃の練習成果を確かめたりする場となるイベントである。観戦型に比べて地方都市や郡部（この場合はいわゆる「地域興し」を目的に含めることも少なくない）で開催されることが多い。したがって、相対的には「農村（地縁）型」ボランティアの要素が強くなる。それは、活動の契機が文化人類学でいう「互酬性」にあると考えられるものである。互酬性とは緩やかな相互扶助関係、緩やかな交換関係を意味し、「困った時はお互いさま」という日本的コミュニティ意識に基いた原則である。典型的には「村」でイベントが開催される。スポーツのイベントらしい。婦人会の会長さんに協力を頼むといわれて、

仕事も割り振られているようだ。どうしてもしたいというわけではないが、頼まれればやるしかない。この前は別のことで隣組の人に助けてもらったし…。」といった例をあげることができよう。コミュニティ崩壊の危機が叫ばれる中、このタイプは徐々に減っていくことが予想される。また現時点でもイベントの開催地が都市部の性格をもつ程度に応じて農村型の契機をもつボランティア主体の比率は低くなっていく。

「観戦型スポーツイベント」は集客力という点から都市部で開催されることが多く、「都市型」と「スポーツ組織型」のボランティアが多数派を占めるものと考えられる。しかし、地方都市などで開催される場合は「農村型ボランティア」の力も大きく、プロサッカーのJリーグ鹿嶋アントラーズのボランティアサポーター、1995年福井県鯖江市で開催された世界体操選手権大会の成功例などをみても、日本の観戦型スポーツイベントは「農村型ボランティア」の活動に委ねられる部分を等閑視できない。「参加型スポーツイベント」は観戦型に比べて「農村型ボランティア」が強く、これに「スポーツ組織型」も加えればかなりの数にのぼる。結局のところそれがどこで開催されるかによって農村型、スポーツ組織型、都市型それぞれのボランティア主体の構成比は異なる。

さて、スポーツイベントのボランティアに特徴的な報酬（非物質的な報酬）にはどのようなものが考えられるであろうか。先の「契機」がボランティア行動を創始する「引き金」であるのに対して、ここでいう「報酬」とはボランティア行動を継続させる心理的な「原動力」である。表に掲げられた「名誉」とはボランティアに参加することによって得られる心理的充足をもたらす意識である。特に参加型よりも観戦型、それもイベントの規模が大きいほど、競技レベルが高いほどその報酬性は高まる。なぜなら、ここでいう名誉は一流選手が最高の競技力を示す舞台をつくり出すことに自らが関わっているという意識によってもたらされるからである。

「選手や参加者との交流」も大きな報酬性をもつが、観戦型では一流選手との交流や運営スタッフとの交流、ボランティア主体同士の交流を意味する。参加型では参加者との交流のもたらす意味が大きい。したがって観戦型と参加型では交流の中身やそれに対するボランティア主体の意識も異なる。

「2. 福祉スポーツ（レク）のボランティア」は障害者スポーツ・レクリエーションと高齢者スポーツ・レクリエーションの管理・運営や指導に関わるボランティアである。管理・運営上の事務的な仕事も少ない。

活動の契機には三つの特徴的なパターンが想定できる。「血縁型」は家族・親族に障害者や高齢者がおり、ともにスポーツやレクリエーションを楽しんだり、リハビリテーションの一環として活動的なレクリエーションを行うことがきっかけとなって、家族・親族に対してはもちろん、彼等とスポーツ・レクリエーションの場を共有する人達に対してボランティア活動を行うという形態を意味している。障害をもつ子どもの両親がそのような形で福祉ボランティアに関わり始めるという例も少なくない。その根源には家族愛やその幅をさらに広げた博愛がある。「ボランタリズム型」はいわばキリスト教的な自発的行為を契機としたボランティア活動を意味する。その根源にはキリスト



教的博愛の存在を認める必要がある。また、たとえば友人が事故で肢体不自由となり、それをきっかけにボランティアに関わるというような人達もいる。この場合は友人のための行為（友情）がさらに幅を広げる可能性を示唆している。さまざまな社会福祉に関わるボランティア活動の一環としてレクリエーションやスポーツにも関わるという場合も多い。「組織型」は、組織構成員である個人ないし集団が、組織活動の一環としてボランティア活動を行ったり、組織がボランティアの要請を受け、派遣という形で活動に参加するというものである。この場合、組織へのロイヤルティが背景にあることを忘れてはならない。特に、福祉関連施設に勤務したり、ボランティアとして仕事を手伝っているような人々が、その延長線上でレクリエーションやスポーツにも関わるということもある。この場合は、施設における障害者・高齢者とレクリエーションやスポーツとの出会いに喚起されたものといえよう。組織型にはスポーツ組織などのように福祉領域とはほとんど接触がないような母体からの出身者と、逆に福祉関連組織からの出身者でスポーツにはほとんど縁がないような人同士が協働しなければならないこともある。そのような場合、基本的なスタンスの違いから、両者の間にコンフリクトが生まれることもある。イベントボランティアのように一過性の活動であれば発生したコンフリクトもイベントが終了してしまえば自然消滅するというところもある。しかし、福祉スポーツのボランティアは日常的・継続的活動であるがゆえにコンフリクトの発生とその解消には注意深い配慮が必要になる。ボランティア参加の契機や出身母体が異なる場合、その点は特に重要である。

福祉スポーツ（レク）ボランティアにとっての（非物質的）報酬としては、まずボランティアの対象者との「交流」をあげなければならない。福祉領域での永年に渡るボランティア活動従事者の中には、障害者や高齢者との接触や交流こそが最大の価値であると指摘する人々も多い。彼等の反応、行為、特に笑顔がボランティアにとっての大きな報酬となるのである。この点に関してボランティア活動の対象がスポーツ・レクリエーションであるかそれ以外であるかは大きな問題ではない。もちろん他のボランティア主体との交流、障害者や高齢者の家族や友人などとの交流もかかる領域のボランティア主体にとっての報酬性は大きい。スポーツイベントボランティアにおいて論議した交流とここでの交流の違いは、その対象が大きく異なることだけではなく、交流の時間幅の相違に由来する。すなわちイベントボランティアが一過性の接触・交流であるのに対して、福祉ボランティアは日常的・継続的な交流ができる。性質の異なる交流が違った報酬性をもつことに注意しなければならない。また、福祉活動への参画意識自体も主体にとっての報酬性をもつ。福祉領域におけるボランティア活動に関しては、自身がそれに関わる意志を持つかどうかは別として（少なくとも他者がそれを行うことに対して）否定的に捉える人は今日の状況からすればおそらく少ない。福祉領域は今や国民的関心事になりつつあるからである。したがって、そこに自らが参画していることを意識できることが当人にとって広く社会から認められている価値ある活動をしているという報酬となり得る。もちろんそのようなことすら全く考えない主体もいる。報酬に対する認識の幅は、このカテゴリーにおいて最も大きいものと推察される。

「3. チーム(クラブ)指導のボランティア」は少年チームや婦人スポーツサークルをはじめとした、さまざまなスポーツチーム(あるいはそれよりも規模の拡大と構造化の進んだ「クラブ」)の指導に関わるボランティアである。学校教職員以外の外部指導者による学校運動部の指導もこれに含めることができる。

このカテゴリーに属するボランティア主体の大きな特徴は、過去に(人によっては現在も)かなりのスポーツ経験を有し、多くの場合一定程度の技能や知識を有していることである。もちろんそうでない場合もあるが、少なくとも被指導者側はそのような前提において指導行動を受容することになる。

ここでもひとまず三つの参与パターンを識別することができよう。「スポーツ組織型」は競技団体などのスポーツ組織に所属しているか、あるいは傘下の集団に所属している主体が、組織からの要請や依頼を受け特定のチームやクラブの指導を継続的に行うというものである。バレーボールや卓球などに代表される地域の婦人スポーツサークルやクラブでよくみられる形態である。この場合、スポーツ組織へのロイヤルティが主体の活動を開始させる重要な要因となる。「学校組織型」は校区単位の少年スポーツチーム(スポーツ少年団など)の指導を自分の子どもが通う学校側や児童・生徒の保護者から依頼されるような場合である。自分の子供がその学校に所属している、自分がその学校の卒業生である、ボランティア主体となる地域住民が学校を中心としたコミュニティに深くコミットしている(これは郡部が圧倒的に多い)など、広くみれば学校組織に対するロイヤルティが無視できない影響力をもっている。「非組織型」はボランティア主体とチーム(クラブ)間の個人的な契約に基づくものである。スポーツ好きの地域住民が少年チームや成人チームの指導者として請われてその地位に就くことも多い。

「報酬」に掲げられた「交流」はチームやクラブメンバーとのそれを中心として、特に少年チームなどの場合は保護者などを含めた周囲の人々との関係に及ぶこともある。ここでの交流は多くの場合、メンバーとの継続的で密度の濃い人間関係によるものである点に最大の特徴がある。非組織型や学校組織型の場合は特にその傾向が強いものと推察される。スポーツ組織型の場合は他の二つの型に近似する場合と、かなりクールな人間関係を保ち、したがって交流が報酬にはならない場合との両極が想定できる。ボランティア主体のパーソナリティやメンバーの指導者に対する構えによって規定される面もある。

「名声」はチームやクラブの成果が一般に競技力の高さによって評価されることと関係している。ボランティア主体の指導活動というコストに対する報酬は、その結果得ることができるであろう競技会での成績に応じた(主にメンバー周辺の人々による)称賛によって形成される名声である。それに固執すれば、勝利のために多くを犠牲にする独善的な行動に陥る可能性を否定できない。

スポーツ指導者についての調査研究の数は非常に多く、ボランティアというよりも指導者としての側面に焦点を当てた指導者心理の解明はかなり進んでいるとみることができる。今後はボランティアとしての側面に焦点をシフトさせた場合に、これまでの研究成果をどのように取り込んでい

くことができるのかについての検討が必要になる。

「4. 学習プログラム支援のボランティア」は地域などで行われるスポーツ教室の指導や運営に関わるボランティアである。「3」との相違点はチームと教室の違いに由来するものであるが、学習指導者と学習者（被指導者）という位置関係が明確にあり、期間が限定的で、指導対象者が一連の学習過程を終了するごとに替わるところにある。ただし、今日では民間の商業スポーツ施設で実施される学習プログラムについてはもちろん、公共のスポーツ施設などで実施される学習プログラムに関わる指導についても一定の規準に従って金銭的報酬が支払われる場合が多い、このようなケースについてはここでの議論の対象にはならない。

「契機」の構造はチーム（クラブ）指導のボランティアと類似性が高い。ただし「学校組織型」に代って「スポーツ施設型」を設定している。これはスポーツ教室に代表される学習プログラムが、一般にスポーツ施設（スポーツセンターなどを含む）において実施・展開されることに起因する。実施される施設やその運営組織に強いロイヤルティをもつ場合、彼あるいは彼女はそこでの指導やプログラムの運営（時として企画をも含む）に携わることになる。スポーツ施設の規模が小さく、また独自のスポーツ経営能力をもたないような場合には、それを管轄する行政組織や公社・事業団など運営にあたる組織に対するロイヤルティがこれに代ることになる。

「報酬」としての「被指導者との交流」は、先に記述したように一連の学習過程が継続する期間だけに限定して行われるという意味でチームやクラブ指導とは大きく異なる。しかしそれだけに密度の濃い、あるいは対象を変えたより多くの人々との交流が可能である。日本では昭和40年代以降、スポーツ教室の修了者をスポーツクラブへと組織化する試みが成された。このような場合は交流の性格が違ったものになるであろう。

「自尊欲求の充足」とは三つの型のいずれの契機をもつにせよ、活動を依頼されること自体が主体にとっての自尊欲求を満たすことになる場合があることを意味している。それは初めて依頼されたり、依頼され続けることが本人に対する一定程度以上の評価の裏返しと理解できるからである。特に、学習プログラムに関わる支援活動は高度の専門性を必要とする場合が多く、欲求充足度は必然的に高まることになる。

「5. その他のスポーツボランティア」は現時点においては、たとえば規模の大きな地域のスポーツクラブにおける管理・運営を支援するため、クラブの役員として行うボランティアなどがあげられる程度である。「1」から「4」がいずれもスポーツ活動そのものに直接関わるボランティアであるのに対して、これはスポーツそのものというよりもスポーツに関わる組織・集団のマネジメントに関してのボランティアという点において他と異なる性格をもる。「5」には、今後スポーツボランティアの対象領域の拡大に伴って、現代日本のスポーツボランティアとは違った領域が生まれる可能性がある。

さて、表の最下欄にはスポーツボランティアに共通する契機と報酬が記載されている。「社会的貢献」とは自分の時間を社会に提供することによって社会や個人の役に立ちたいというボランティ

ア主体の自発的な意思を示している。「社会的連関」とは現代社会の顕在的な問題とされる疎外感や他律性(他者の意思や制度の中で事象が進展し、状況を自らの意思でコントロールできないという意識)から逃れ、主体的に社会や個人とつながっていたいという意思を示している。「専門的能力の開示」とは自分の専門性や能力を活用したり、他者に対して合理的に示す機会としたいという意思を意味している。これらはいずれも(スポーツに限らない)ボランティアの動機として広く認識されてきた要素である。スポーツボランティアにおいてもこれらを軽視することはできない。ただし、いずれの категорияにも共通するもので、特定化は困難である。

報酬についても「自己実現」、「(他者や社会との)関係欲求の充足」、「(対象者やその周辺の人々からの)感謝の念」という、一般的にはほぼ理解されているものをあげた。これらもいずれかの category に固有の報酬とするのは難しい。

#### IV. 「スポーツボランティアの行動原理」の実証

ここまでやや詳細に述べてきたスポーツボランティアの行動に関わる論理展開は、逐次記述されてはいないが、理論的演繹、先行研究の検討、いくつかのボランティア活動についての参与観察、ボランティア主体へのインフォーマルなインタビュー等々に基いている。いうまでもなくそこに示された諸命題は検証の対象となる仮説に置き換えられなければならない。仮説検証のための概念の操作化や尺度構成を含む一連の実証作業を今後の課題とすることができる。それはスポーツボランティアのメカニズムについての経験的解明と言い換えることができるかもしれない。

ボランティアの支援なしにスポーツ行動やスポーツ生活を成立させることができない、あるいは成立させにくい人々は決して少数ではない。スポーツボランティアは文字通り「みんなのスポーツ」実現の砦であり、かつ日本における今後のスポーツ文化発展のシンボルとなる可能性もある。スポーツボランティアは既に確認したように、かなり広範な活動領域を抱えている。それぞれの category に固有の特性と共通する性格、スポーツ以外の領域との同質性や異質性、さらには今回論じられなかった新たな category や契機のパタンの析出など今後の課題は多い。

#### 注

注1) ファッド(fad)はファッション(fashion)よりもサイクルの短い一時的で急激な流行を意味する。

注2) Nehnevajsa and Karelits (1976)による、1970年代中頃の合衆国におけるボランティアに関する調査報告書は、当時の状況と合衆国におけるボランティア理解の仕方を把握する上で興味深い。この報告書は14の章からなっているが、第4章では「宗教的活動におけるボランティア」、第6章では「最初に非宗教的なボランティア活動を行った理由」と表記されている。宗教的ボランティアは理由を問題にせず、非宗教的ボランティアについてはその理由を広範に分析している。ここでの説明はこの報告書の基本的スタンスと整合している。

注3) 総理府が平成5年に行った「生涯学習とボランティア活動に関する世論調査」によれば、過去・現在を含めてボランティア活動をしたことがある者は30.1%であり、そのうちの28.3%(全体の8.5%)が「体育・スポーツ・文化に関するボランティア活動」を行っている。

注4) 参加型スポーツイベントとは、多くの市民スポーツ実践者が日常とは異なる特別のスポーツ機会として、それに参加して楽しんだり、日頃の練習成果を確かめる場としたりするようなイベントのことである。市民スポー

ツ人口の多い都市部はもちろん、地方都市や郡部などにおいても非常に多くの参加型イベントが開催されるようになってきている。特に1980年代以降、マラソン大会、ジョギング大会、ウォーキング大会など、地域そのものを舞台とするイベントの興隆（日本全体で、その数は年間3,000を越えるという報告もある）にはめざましいものがある。それらには地域振興など地域の活性化を目論んだものも少なくない。

- 注5) 観戦型スポーツイベントは一流競技者による競技を直接に、あるいはマスコミ等を通して間接に、「みせる」ことを第一義的な目的としたスポーツイベントである。そこには一般に莫大な経営資源（ヒト・モノ・カネ・情報）が投入される。広島アジア大会、幕張世界柔道選手権、福岡ユニバーシアード、鯖江世界体操選手権大会、熊本世界ハンドボール競技会、長野冬季オリンピックなど、ここ数年はほぼ毎年（年によっては年2回以上）世界レベルのスポーツイベントが日本で開催されている（される予定である）。
- 注6) 政府や行政主導のイベントは日本特有の（上下関係の明確な）行政システムの中で、権限関係や命令系統をはっきりとさせた運営が成される傾向にある。
- 注7) 「行う人」はいつもスポーツ行う、「みる人」はいつもそれをみる、「支える人」はいつもそれを支えるというように役割行動が固定するのではなく、スポーツの場や状況によって相互の立場が変わり得ることを示す。例えば筆者はスポーツイベントのマネジメントというスポーツを「支える」立場にあることも、選手としてスポーツ大会に参加することも、観戦者として競技場で高度の競技を観て楽しむこともある。もちろんそのような位相の変化を好まない（起こさない）人もいる。
- 注8) 人間の社会的行動をどのようにみることができるとは、心理学や社会学の基本命題である。本稿では人間の社会的行動は「コスト（行動を発現し、継続することに関わって払わなければならない犠牲や負担）」と「報酬：reward（引き換えに手に入れることができる本人にとっての価値）」の交換関係の成立によって生起するものとの前提に立つ。少なくともコストと同等かそれを上回る報酬が期待できなければ社会的行動は発現・継続しないと考える。ボランティア活動の有する、主体の合理的価値判断に基づく社会的行動としての側面をより積極的に捉えようとしたためである。ただし、ボランティアである以上、報酬は金銭や物品などを除いた「非物質的報酬」が中心になることはいうまでもない。非物質的報酬には「活動のプロセス自体の面白さ・興味深さ」や「活動後の達成感・満足感」などによってもたらされる「内的報酬」と、外部から与えられる賞賛や感謝の念などの「外的報酬」に区分することができる。この点に関して詳細は武隈（1986）を参照されたい。
- 繰り返すが、ここでいう報酬とは行為の「見返り」としての物質的報酬ではない。心理的充足を中心とした本人にとっての価値である。したがって動機づけ理論でいう誘意性（valence）の名辞を与えることも可能であるが、コストとの交換という立場をより鮮明にするため、誤解を恐れず敢えて「報酬」という概念を用いる。

## 文 献

- 1) Andrew, J. (1996) Motivation and Expectation of Volunteers Involved in a Large Scale Sports Event -A Pilot Study. Australian Leisure 7 (1): 21-25.
- 2) Bannon, J. J. eds. (1985) International Symposium on Sports for Everyone. Proceedings. Academy of Parks and Recreation Administration
- 3) Gould, D. and Martens, R. (1979) Attitudes of Volunteer Coaches toward Significant Youth Sport Issues. Research Quarterly 50(3): 369-380.
- 4) 松尾哲也他 (1994) ボランティア・スポーツ指導者のドロップアウトに関する社会学的研究：指導への過度没頭と生活支障の関連及びその規定要因について. 体育学研究 39(3): 163-175.
- 5) McClam, T. (1985) Volunteer Motivations and Rewards : Shaping Future Programs. Annual Conference of the American Association for Counseling and Development, Proceedings : New York, p. 1-12.
- 6) Nehnevajsa, J. and Karelitz, A. P. (1976) Patterns of Volunteering Activities in Standard Metropolitan Statistical Areas. Pittsburgh Univ., Pa. Center for Urban Research.
- 7) 長ヶ原誠他 (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2) —ボランティアの継続意欲の視点から—。鹿屋体育大学研究紀要 6:69-76.
- 8) 佐藤 豊他 (1996) スポーツボランティアの参加動機に関する研究 —1995年世界体操競技選手権鯖江大会について—。日本体育学会第47回大会号 p. 185.
- 9) スポーツイベント研究会編 (1996) 福岡ユニバーシアード調査報告書
- 10) Slack, T. (1981) Volunteers in Amateur Sport Organization: Biographic and Demographic Characteristics and

Patterns of Involvement. Regional Symposium of the International Committee for the Sociology of Sport. Proceedings:British Columbia, p. 1-23.

- 11) 杉野昭博 (1995) 「ボランティア」の比較文化論② ボランティアの文化史. 月間福祉 30(12):68-73.
- 12) 武隈 晃 (1986) バレーボールの学習過程に関する動機論的研究(I). 鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編 37:136-137.
- 13) 綿 祐二 (1992) 障害児キャンプにおけるボランティア活動の継続性に関する研究:役割理論適用による役割に伴う自己評価と継続性の関連. 東京都立大学体育学研究 17:37-44.